

令和4(2022)年度 岡本特別支援学校 学校評価シート

教育目標、学校経営方針

教育目標	児童生徒の病状、障害に応じた教育を行い、一人一人の個性、能力、創造性を伸ばし、社会に参加、貢献できる人間を育成する
学校経営方針	○ 児童生徒・保護者のニーズに応じた質の高い教育実践の充実 ○ 児童生徒の心身の健康や人権を守る、安心・安全な教育環境の整備 ○ 学校・家庭・病院・地域が連携した学校づくりの推進 ○ 教職員が一人一人の力を発揮する、やりがいのある学校づくりの推進

A:達成できた
B:概ね達成できた
C:改善が必要

重点目標(推進担当)	評価項目(各学部、分掌部で1点)	現状	達成目標	評価の観点	評価	次年度の改善策
○児童生徒・保護者のニーズに応じた質の高い教育実践の充実 ●病弱教育についての専門性向上のための研修や授業研究の推進 ●教材の工夫とICT機器の活用 ●個別の教育支援計画(指導計画)の活用と次のステージへの円滑な移行 ・キャリア教育の推進 ・関係機関との必要な情報共有 ・進路希望実現に向けた対応 ・前籍校や地元校への復帰支援	【高等部】 ・生徒の気持ちを受容するとともに、状況を適確に判断し、健康な心と身体で学校生活を送れるよう支援する。	・日頃の情報交換や話し合いに加え、個別の指導計画について全体で意見を交わし、適切な支援について検討しているが、必要な支援の段階を知るためにより細かな実態把握が必要と感じている。	・Co-MaMeを活用して適確に実態把握を行い、支援の段階について共通理解した上で、必要な支援やニーズ等を学部全体で話し合う。	・Co-MaMeを活用して学部の職員全員で実態把握を行うことができたか。 ・新学期の個別の支援計画を検討する際に、生徒への支援が適切であったと評価されたか。	【A】 ・Co-MaMeを活用し実態把握を行った上で、個別支援検討会で全職員で適切な支援について話し合った。生徒の状況や実態について共有し、様々な側面から多面的に考え、同じ方向性で生徒の支援にあたることができた。 ・支援については適切と思われたが、学期ごとにより適切な方向に修正することができた。	・Co-MaMeから得られた結果をもっと活用できるようにしていきたい。 ・学期に1回だけでなく、日頃の情報共有から、より適切な支援になっていくように修正していけるとよい。
	【おおとり分教室】 ・児童生徒や保護者のニーズを把握し、病棟や地元校と連携を図り、適切な復学支援につなげる。	・情報交換会を行うケースでは、関係者間で共通理解が図られ、スムーズな復学に向けた支援ができています。しかし、情報交換会を行わないケースでは、もう少し支援の充実を図る必要がある。	・チェックシートを活用して、児童生徒や保護者の状況やニーズを的確に把握し、関係機関と連携した復学支援を行う。	・チェックシートに基づき、必要な情報の確認や関係機関との連携が適切にとれたか。 ・実施状況を記録し、児童生徒に合ったより良い支援を検討することができたか。	【B】 ・チェックシートを見直したことで整理され、使いやすくなった。 ・チェックシートを活用しての復学支援ができた。一方で退院のタイミング等で十分な支援が難しいケースがあった。	・今年度も病棟や地元校と連携をして復学支援を行ってきたが、引き続き病棟との連携を密にして適切な支援ができるようにする。 ・地元校との連携は、地元校の都合もあるため必要に応じて時間の調整や連絡手段を検討しながら進める。
	【教務部】 ・校内研修の充実や外部研修の参加を促進し、病弱教育の専門性と資質の向上を図る。	・病弱教育を受ける児童生徒の実態は様々であるため、ICT機器等の活用も含め、様々なニーズに応じた指導が必要となる。	・研修の内容を日々の指導に活かし、様々な面での病弱教育の専門性を高める。	・日々の指導に研修の内容を活かせることができたかどうか。(学部・学級ごとに、研修内容やICT機器の活用について、2学期末にアンケートを取る。)	【A】 ・外部講師のリモート研修を実施でき、アンケートでは、ほとんどの教員が「病弱教育の幅が広がった」「やや広がった」と回答した。 ・掲示板を使って研修の通知をし、研修参加を促進できた。	・教務部員による反省では、Bは一人のみであったが、学校全体ではBの方が多く、部内と部外で温度差があった。病弱教育の専門性の幅が広く、所属によって必要となる専門性が異なってくるためではないかと考えた。そのため、来年度は、目標をもっと絞った内容にする。
	【学習指導部】 ・ICT機器を利用した学習指導と交流及び共同学習の充実を図る。	・昨年度からの継続で電子黒板などのICT機器を利用して授業を行っている。また、コロナ禍で登校や直接交流が困難な場合はウェブ会議サービスや映像記録を利用し間接的に行事などに参加できるようにしている。	・児童生徒の実態に応じたICT機器を利用し、主体的に取り組む授業や社会、地域とつながりをもつことができる。	・ICT機器を利用した授業により、児童生徒が主体的に学習に取り組むことができ、理解やできることを増やすことができたか。 ・登校や直接交流が難しい児童生徒との参加や間接交流を工夫して行い、充実させることができたか。	【B】 ・ICT機器を活用した授業を実施してきたが、児童生徒が主体的に取り組む、理解できたという根拠に乏しく、評価することが難しかった。 ・交流及び共同学習では、多くの学部でICT機器を活用し、双方向となるよりよい間接交流の方法を検討し、実施することができた。 ・登校が難しい児童生徒に対し、ICT機器を利用し、ZOOMを使ったオンライン授業を実施することができた。	・ICT機器の活用について、教材等を含め情報共有するとともに、児童生徒の変容が明確になるようにアンケート等を実施、検証し、評価の根拠とする。 ・交流及び共同学習では、間接交流が継続するのなら、ICT機器を活用し、今後も試行錯誤しながら、より効果的な交流の在り方を探っていく。
○児童生徒の心身の健康や人権を守る、安心・安全な教育環境の整備 ●感染症の予防と健康指導の充実 ・連携病院の助言を踏まえた感染症対策の実践 ・児童生徒の一人一人の疾病への配慮と職員研修の充実 ●防災教育の推進、健康・安全指導・安全対策の充実	【小学部】 ・児童の情報を共有し体調の変化に応じた対応をすると共に、医療的ケア実施児童に対して安全を期した対応をし、教員・看護師が連携して実践する。	・体調の変化が著しい児童や進行性の病気の児童もいる。担任・副担任以外に複数の教員が指導に当たり、医療的ケア対象者は看護師も複数で対応している。緊急時の避難時対応も含め、普段の情報共有が大切である。	・児童の病状や体調について情報交換し適切な教育環境を整えて対応する。 ・医療的ケアが安全に実施できるように、個に応じた対応を教員・看護師で共有する。	・児童の病状や体調について適宜伝え合い、変化に応じた対応ができたか。 ・個に応じた医療的ケアの対応を教員・看護師で共有し、安全に実施できたか。また、緊急の避難時対応では、他学部の教員とも情報の共有をして実施できたか。	【A】 ・小学部全体で児童の情報を共有し、病状や体調の変化に応じて対応をすることができた。 ・医療的ケアの対応を看護師とも共有し、安全に実施できた。緊急の避難時対応では、他学部教員とも連携をし、避難訓練を実施することができた。	・情報の共有は、来年度も継続して行い、安全を期した対応がとれるようにする。

・自分の身を守る安全指導の実施 ・ヒヤリハット事例の集約と共有 ●教職員の人権意識の高揚と、児童生徒の心と健康を大切にした指導の充実	【中学部】 ・生徒が安全に安心して学べるように学習環境を整えたり、学習内容について検討したりする。	・学校での活動や学習に見通しをもちにくく不安になりやすい。 ・ものごとに柔軟に対応することが苦手である。 ・周囲の刺激により、気持ちが不安定になりやすい。 ・視力低下、運動制限や行動制限があり、身の回りのことに支援を必要としている。	・ICT機器を活用して教材や提示の仕方を工夫することにより、生徒が安心して分かる授業を行うことができる。 ・生徒が心と体の健康を維持しながら安心して学習に取り組める環境づくりをすることができる。	・生徒のできることできないことを、生徒や保護者と話し合いながら決定し、できる限り生徒が自己の運動制限や活動制限、心と体のバランスを考えながら学校生活に取り組むことができたか。	【A】 ・ICT機器を活用して生徒にわかる授業を展開するよう取り組むことができた。 ・体力面やこだわりなどから運動制限や活動制限がある生徒の思いに寄り添い、できるだけ無理なく授業や行事に参加できるように、生徒と相談したり、保護者や関係機関の助言などを生かしたりしながら丁寧に指導することができた。	・重複障害学級に所属する生徒が入学してくるため、改めて教室内外の安全面での環境整備を図る。
	【院内学級】 ・感染症の予防に努め、安全に授業を行う。	・教員の健康管理は各自で行っている。また、教員の家族の健康状態についても観察し、報告を行っている。 ・手で触れる場所、使用した教材は、毎日塩素系の消毒液で消毒している。 ・病棟の建物内ではフェイスシールドを、授業中はビニールエプロンとビニール手袋を児童生徒ごとに交換して着用している。	・スタンダードプリコーションについての研修を適切な時期に行い、感染症予防の意識向上を図り、体調管理に努める。 ・実施箇所を表記した消毒確認表を活用し、毎日消毒を行い、複数の教員で確認する。 ・場に応じて、フェイスシールド等の着用を忘れずに行う。	・毎日、体温・体調を健康確認表に記入できたか。 ・スタンダードプリコーションについての研修を適切な時期に行い、理解して実践し、感染予防の意識向上が図れたか。 ・毎日の消毒を徹底し、複数の教員で確認できたか。 ・場に応じたフェイスシールド等の着用を忘れずに行うことができたか。	【A】 ・感染症や手洗い等についての研修を学期ごとに実施した。 ・感染症の予防に十分に配慮した授業を行い、そのための自己管理も徹底して行っている。	・病棟での授業実施の際に装着するサージカルやN95マスクの扱い方、フェイスシールドの装着及び扱い方等について、学期に1回、全員で確認する機会を設ける。 ・児童生徒数が増えるので、今年度以上の職員数になることが予想される。そのため、プレイルームでの密を避けることは難しい。感染リスクの軽減のため、毎日の打ち合わせや会議等を、より広い部屋で行う。
	【健康安全指導部】 ・自分の身を守る避難訓練、安全指導を実施する。	・年に5回実施している避難訓練（引き渡し・春の火災地震・不審者対応・秋の火災地震・予告なし）を実施している。訓練後の反省をみると、回収率が高く、内容も建設的な意見が多く、児童生徒、職員の安全指導の意識は高い。 ・児童生徒の実態や必要に応じて、丁寧に指導している。	・事前学習資料や収集した情報等を教職員と共有し、常に実践を意識して（実践的な気持ちで）教職員自ら、適切な判断をして訓練に参加することができる。 ・「自分で自分の身を守る」ことができる児童生徒を育成することができる。	・教職員が適切な判断力を身につけることができたか。 ・児童生徒が自ら考え行動することができたか。 ・各訓練で「総合的によくできた」の教職員の反省(5回平均)が80%以上だった。	【A】 ・点検カードを有効に活用し、的確に判断し行動できた。また、実際の地震時にも活かされた。 ・児童生徒は、事前学習や訓練時の行動、対応が真剣に落ちていてできた。 ・職員の反省は、「よくできた」が40%、「できた」が45%だった。	・災害時でも対応できるように、訓練であがった課題はその都度検討する。 ・今後も訓練をアップデートし、マンネリ化を防ぐ。 ・本部や健安部の職員が変わっても、正確に対応できるようにしていく。
○学校・家庭・病院・地域が連携した学校づくりの推進 ●関係機関と連携した取り組みの充実と積極的な発信 ・家庭や病院との細やかな連携 ・実施可能な交流及び共同学習の検討と実践 ・積極的なホームページの発信と地域との連携	【渉外部】 ・PTA活動において、内容や方法を工夫しながら充実を図る。	・活動に参加できる保護者の多くが理事になっている。 ・参加できなかった保護者には、活動の様子が伝わりにくい。 ・昨年度はPTA活動の中止もあり、保護者同士の情報交換をする機会が少なかった。	・コロナ禍でもできる活動や内容を考慮しながら、できる範囲でPTA活動を実施していく。 ・活動内容をホームページや掲示板で発信する。 ・理事会や委員会の後に、情報交換ができる時間を設ける。また、進路・卒後支援部と連携し、情報提供の場を設ける。	・感染対策をしたり、内容を工夫したりしながら活動に取り組むことができたか。 ・ホームページに関しては、記事の内容を工夫して発信したり、保護者へのアンケートでホームページの閲覧状況を把握したりすることができたか。 ・保護者が情報交換を活発に行う様子が見られたか。	【A】 ・コロナ対策を充分に行いながらPTA活動を実施できた。保護者は協力的であった。 ・活動後に活動内容の様子をH・Pで発信することができた。閲覧している保護者が多い。 ・新しい試みとして、折鶴アート制作を行った。会議などに参加が難しい保護者にとっては、有意義であった。 ・短時間であったが、会議後に情報交換の時間を設け、親睦を深める機会となった。	・保護者の負担を軽減するため、活動内容を考慮して、理事の構成を見直す。（学部学級の代表はなしとする。） ・今後もHPの掲載を行い、PTA活動の様子を発信していく。また、活動内容も工夫しながらよりよいPTA活動ができるよう模索していく。 ・情報交換の時間や校内研修等を実施し、保護者同士の親睦が深められるようにしていく。
	【進路・卒後支援部】 ・進路実現に向けて主体的に取り組めるよう進路情報を提供する。	・進路だよりやホームページに各学部の進路に関する行事や、キャリア教育の取り組みを掲載している。 ・進路情報コーナーを校内に2カ所設置し、情報提供を行っている。	・進路情報をホームページや進路だより等でこまめに発信する。 ・PTA行事など保護者が集まる場に、進路情報コーナーを設置する。	・進路だよりやホームページの内容を工夫し、定期的に発信することができたか。 ・渉外部と連携し、PTA行事などで進路情報コーナーを設置し、情報提供ができたか。	【B】 ・進路行事やキャリア教育の取り組み等を写真やイラスト等も入れて読みやすくし、進路だよりやホームページに掲載することができた。 ・年に数回、PTA行事などで進路情報コーナーを設置し、福祉事業所のパンフレットをサービス毎にファイルにまとめて提示したり、キャリア教育の取り組みや高等部の作業の様子等を掲示したりすることができた。	・児童生徒の実態や居住지가様々であるため、今後も保護者や児童生徒のニーズを確認しながら情報提供を行っていく必要がある。また適切な進路指導のために、教員へ情報提供も充実させていきたい。
○教職員が一人一人の力を発揮する、やりがいのある学校づくりの推進 ●一人一人の教職員が力を発揮し、相互に支え合える学校づくり ・教職員の連携・協働体制の確立 ・互いの教育観を認め合い、意見交換できる環境、風土の醸成 ●働き方改革の推進	【支援部】 ・円滑な連携を図るために協働体制を確立する。	・関係機関や各学部・院内学級・分教室、分掌部との連携が必要な業務が多い。	・就学、転入・転出業務を円滑に行うため、関係機関や各学部・院内学級・分教室、分掌部との連携を図る。	・学校公開・体験学習、就学・教育相談、高校生支援・復学支援等について、業務が円滑に遂行できるよう、マニュアルをもとに連携を図っていくことができたか。	【A】 （本校）学校公開・体験学習、就学（教育）相談についてはケースごとに細やかな配慮が必要とされた。関係機関との連絡・調整後、その都度各学部学級と連携し実施することができた。（分教室）就学（教育）相談・復学支援・高校生支援について、関係機関と連携を図り業務を円滑に行うことができた。	・今後も、児童生徒居住地・教育委員会担当者と情報交換がしていけるように努める。また、就学（教育）相談についても、事前の情報収集を行うなど、関係職員で共通理解が図れるように努める。 ・各マニュアルについて、来年度も実施しながら確認し、必要に応じて変更していく。また、マニュアルを基本にし、ケースに応じて臨機応変に対応できるようにする。